

分科会より報告会

司会(清水) お待たせいたしました。少々時間が押しましたが、ただいまから分科会の報告に移りたいと思います。まず第一分科会からの報告をお願いしたいと思いますが、報告される方はお名前と勤務校をお願いします。

第一分科会「理念と情熱 …… いかにして教育理念の共有化を図るか」より報告

高橋 第一分科会の高橋です。勤務校は明治大学です。

第一分科会では25名の参加者を得まして、池上和文先生から「理念と情熱」というテーマで報告をいただき、分科会が進行しました。この報告には、「いかにして教育理念の共有化を図るか」という副題がございましたが、発表者自身が、現職校長時代に、延岡西高校と延岡東高校の2校を統合し延岡星雲高校を開設するという、学校の統合事業に携わり、教育理念をどう創造したか。また、スクールアイデンティティの確立を図るために、教育理念をどう具現化し維持しようとしたかについて、非常に熱い語り口で語っていただきました。新設高校への生徒の求心力を高めるためにどのような方策をとったか、特別活動や総合学習の時間をどのように活用したか等について、品性教育としての「マナーとルール学習」などの具体的な事例を挙げながら話をいただきました。学校現場にある者にとっては、非常に参考になる話であったと思われます。

急激な少子化を背景に、いま高校においては、全国的に統廃合が進んでおりますが、創立理念や歴史・伝統の違いの他に地域の利害等も絡んで、なかなかうまくいかない例が多いようです。そうした中で本事例はかなり完全なうちの成功例だったろうと思われます。ただしご退職のあと、そういうような理念が正しく受け継がれていったかどうか、ということでは若干の疑義があったようです。このあたりの事情については、直接発表者である池上先生の言葉を要約して伝えることにします。

＜ドイツの教育哲学者ボルノウは、教育が成功する前提（教育を支えるもの）として信頼・安心などの「教育的雰囲気」を重視しました。これを学校としてとらえると「校風」ということになります。すなわち「風が人を創る」ということです。そこで、延岡星雲高校は創立の辞を「新しき風を起こせ！」と定め、「志の風」「美しの風」「創造の風」の3つを校訓として、「高い志の下に品性を磨き新しき価値を創造する人間の育成」を教育目標としました。教育は目的的行為です。教育目標に従って、知・徳・体すべての面で、生徒たちに価値ある変容をもたらさなければなりません。そして、それを可能にするための基底として「教育的雰囲気」があるならば、教育理念も確実に継承されていかなければなりません。校風が継続されることによって卒業生としての絆が形成され、生徒たちは精神的にも安定するからです。

教育における継続性の問題はかくも重要な意味をもっております。したがって、学校の教職員のみならず、生徒、保護者がともに教育理念を共有することは教育が成功する前提

ともいえるのです。理念は具現化されてこそ意味がありますが、理念を具現化するのは個人の情熱以外にはありえません。ところが現在の学校現場はどうでしょうか。改革イコール改善という「改革信仰」が蔓延していないでしょうか。この風潮に一層拍車をかけたのが教育現場への市場原理主義の導入であるように思われます。教育をデパートの商品と同じように見る考え方の下では、「継承」という教育の要諦は軽視され、継続することの評価は低くなってしまふのを否定できません。校長が代わる度に教育方針が代われれば、「教育的雰囲気」に変化が生じ、子どもたちの精神は非常に不安定に陥るのではないのでしょうか。今教育における「不易」とは何かが根本的に問われているとあってよいでしょう。教育も人間の生命と同様、過去、現在、未来という連続性の中にあります。そうであるならば、わが国の歴史と伝統の中に豊かに蓄積されてきた先人の知恵の中に、教育における「不易」を再発見する時が来ているように思われます。>

理念は常に変わるものではなく、教育における不易と流行という観点から、不易の部分があまく受け継がれていくことによって、本来新設高校の理念が生きていくということであるわけなのですが、そこあたりのところが課題として残ったということでありました。

25名の参加者からは非常に活発な議論がありました。現在管理職にある現職の先生方や過去に管理職を経験されたOBの先生方からも感想や意見が多く出されましたが、これらは学生の参加者にとっても大きな意義があったようです。私も参加していて非常に有意義な分科会だと思いました。以上で報告とします。どうもありがとうございました。(拍手)

司会 高橋先生、どうもありがとうございました。では続いて第二分科会の報告をお願いします。

第二分科会「社会的事象への興味を喚起する小論文指導」より報告

吉澤 第二分科会の司会を務めさせていただきました吉澤と申します。こちらの明治大学でいまお世話になっています。第二分科会では目白研心中学・高等学校の大木玲子先生から「社会的事象への興味を喚起する小論文指導」というご発表がありました。現在、大学入試で小論文が増えていることに加えて、先生のご勤務校には、センター方式や一般入試ではなく指定校推薦、あるいはAO、その他の小論文がかわってくる試験で合格していく生徒さんが少ないという状況があり、先生ご自身が進路指導主任であるというお立場で担当した国語の小論文演習という科目（注：学校設定科目と思われる）ですが、こちらの指導の内容についてお話をいただきました。

先生は、大学入試の小論文には課題文が与えられて、その要旨を800字でまとめるとか、あるいはその課題文の中のアンダーライン部分について400字ぐらいでまとめるとかのようなものが多いということから、まず課題文を与え、そこにアンダーラインを引かせて要約をさせる、次にそれに関連する具体的な参考資料や情報—新聞等から持ってくるものが多いようですが—を与えて、それを分析させ、意見をまとめさせ、その上で課題文全体を

通しての意見にまで高めていくというご指導の方法を紹介されました。その上で、実際に生徒さんが書いて大学に提出された論文の見本をいくつか示してくださいました。

先生は指導のポイントとして、課題文を的確に要約すること、資料を効果的に活用すること、明確に段落構成すること、最終的に自分の意見にまでまとめ上げていくこと、この4点を挙げていらっしゃいました。

こういう指導を通して先生は、この授業が国語の科目に属しますので、国語の教師として指導されていますが、社会問題について教えるところから始めなければいけないということで大変苦勞されているが、生徒が社会事象を通じていろいろな事象間のつながりを理解でき、世界を広げていくという効果もあり、授業を通じて自分自身を考えさせる営みへ持っていけるといった、この授業の存在意味を私たちに披瀝してくださいました。また、論文指導をするには、指導する教師がスペシャリストである以上にゼネラリストであることが必要だということもお示してくださいました。

出席した16名の者で活発な質疑応答を行いました。社会事象への関心をどのようにして生徒に持たせればよいか、あるいはこういう指導は国語の教師だけではなく、他の教科の教師も何とか加わることはできないか、というようないろいろなご質問、ご意見が出ました。先生はこのような科目を大学の論文を使う入試に備えて設けなければならない状況についての疑問も投げかけていらっしゃいました。

たとえば一つの例を挙げますと、夏休み前から出題されている課題について生徒が書き、それを指導し、その結果合格するかしないかの発表が12月になる。これだけの労力を教師も生徒も費やして、合格すればいいですが落ちた場合は全くその苦勞が無駄になる。そればかりかその期間、当の生徒は一般入試を受ける勉強もできない。こういう大学入試の近年のあり方について、そしてこうした負担と矛盾を抱えて指導しなければいけない状況についての問題提示をされていました。

最後に、中学校の先生、高校の先生、どちらも出席されていましたので、それぞれのお立場における国語教育の観点や考え方の違いが披瀝されました。そうしたそれぞれの教育の場のお立場の違いから生じる考え方の違いについては、この教育会を通じて意思疎通を図り、意見交換をし、コミュニケーションできるとよいのではないかとということで、この会を終わりました。以上です。(拍手)

司会 吉澤先生、報告ありがとうございました。続いて第三分科会の報告をお願いします。

第三分科会「教員の世界観をどう出すか」より報告

滝沢 第三分科会の司会を務めました滝沢と申します。勤務校は国立学園小学校です。明治を出てから小学校の教員を取りましたので、現在、小学校に勤めています。第三分科会は大宮開成中高の出川先生が自分の「教員の世界観をどう出すか」ということで約40～50分ほど非常に熱演、パフォーマンスを込めて語ってくださいました。隣にいたのですが、

熱気を感じるほどのお話でした。

具体的内容は、自分が2002年に就職してから、自分で現場にいて思うこと、具体的には授業のことや生徒指導のこと、学級経営、学年経営で、どういうところに心を砕いているか。あるいはどういうところで課題があるのか。たとえば具合的にいうと、中学高校では教室や掲示物などはあまり関心が払われないけれど、自分で出費をしてでもいろいろな工夫を重ねている。そのことで自分のカラーを出そうとしているようなお話がありました。

またカラーを出しすぎてもいけないし、また出さなくても魅力もないだろうという話で、ではどんなことに意識して取り組んでいるかということ、自分が好きにならなければ、生徒も好きにならないだろう。ということで、とにかく自分が教えること、あるいは教える教科にほれ込む。そしてそれをアピールする。そのことによって生徒から興味・関心を引き出したり、維持したりというような話を具体例を交えてお話ししてくださいました。

最後に自分が明治で学んだことをいま教えている生徒たちに返してあげたい。そして「大学ってこんなに楽しいんだよ」ということを、ただ進学実績、合格実績を上げるだけではなく、その後のことも生徒たちに伝えていきたいという話がありました。

それを受けて、後半、質疑応答といたしますか、話し合いになったのですが、参加者を私は確認できなかったのですが、40人以上の参加者があって、半数近くは学生でしたでしょうか。若い方が多く、発言の最初に名前や学部名を言うのですが、「何々学部1年です」というと「1年生か」と、年齢でいうと19か20、私の半分以下だと思って聞いていました。

いま自分がやっていること、あるいはついこの間まで中学・高校で学んできたことを交えながら話してくださる学生さん、あるいは現職の先生方もいらっしゃいましたので、自分の学校ではこうだとか、自分の経験ではこうだという話をしてくださいました。最後に「学生の時にいっぱい経験しなさい。いろいろなことをしなさい、その引き出しが教員になってからいろいろなところで思わぬ財産になる」と非常にいい意見を言ってくださった先生がいらっしゃいました。いまここにいらっしゃいますでしょうか、そんなかたちで分科会を終わることができました。以上で報告を終わります。(拍手)

司会 滝沢先生、ありがとうございました。続きまして第四分科会の報告をお願いします。

第四分科会「『ナナメの関係』を活用したキャリア学習プログラム

「カタリ場」という授業のつくり方」より報告

大坪 第四分科会の報告をいたします、大坪です。私立富士見中高等学校に勤務しています。そろそろ乾杯の時間も過ぎていますが、急いで報告をしたいと思います。第四分科会はNPO法人カタリバの竹野優花先生にカタリバの意義や実践例などをお話いただきました。

同名のテーマにあります「カタリ場という授業のつくり方」という同名の書籍も出され

ていますし、マスコミなどでも取り上げられていますので、ご存じの方もいらっしゃると思うのですが、学生のボランティア、社会人のボランティア 4000 人ほどを抱えていて、学校に 100 人単位で行って体育館などの広いところで車座になって、皆で語り合うというような取り組みをしているNPOです。

なぜそのようなことをしているのかということだったのですが、日本の場合には、学生・生徒の自己肯定感が非常に低い。諸外国に比べても低い。自分の参加によって社会現象が少し変えられるかもしれない、ということに対して7割ぐらいはそうは思わないという生徒たちをどうしたらいいのか。結局モチベーションを高めるためには、その個人の能力、意識を社会とどうつなぐか。あるいは幅広い他者と意見を交換する機会、自己有用感を自覚する機会、あるいは社会に目を向けるきっかけ、そういった場を与えたいということでこのカタリバというNPOを立ち上げたということです。

学生ボランティア、社会人のボランティアが高校生たちと話をし、いろいろな語りをする中で、生徒たちは自分のこれからへの期待感を感じ、具体的な目標設定までさせるということです。具体的な目標設定をすることで、また社会に対する関心や自分の客観的な認識ができるようになってくる。そういう中で自己有用感も上がり、主体性も生まれてくる。

ではなぜ学校の先生、友人ではなく、学生ボランティアや社会人、そういう人たちがいいのか。親や先生は縦の関係で利害関係がある。友人は横の関係でやはり出る杭は打たれるし、あまり突飛なこともできない。そういうときに基本的にあまり関係のないナナメの関係の人が、そういうところに入ってきて、いろいろと分け隔てなく話せることが有用なのではないかということです。

その大学生や社会人はパッと来て、何か適当なことをしゃべるのかというと、そうではなく、そのために2カ月ほどしっかりと準備をしていく。特に学生ボランティアはしっかりと2カ月間準備をして生徒たちの人生の指針とは言いませんが、生徒たちに期待感、自己肯定感を与えるための準備をしっかりとしていく。それがまた大学生にも社会人に必要な力、社会に求められる人材力をつけていくきっかけにもなっているということです。

最後に、カタリバの存在はあくまでもきっかけづくりである。カタリバですべてができるわけではなく、やはりスイッチを入れる前後、学校をどう利用していくか。われわれ教員の仕事が一番重要である。そういったNPOが外から支えてくれる、というかたちがこれからの教育では必要ではないかというお話がありました。

その後質疑応答等もあり、最後に生徒たちの自己有用感・肯定感を高めるためにはどんなことが必要かということをつづぐりのグループに分かれて10分ほど懇談をしながら、最後に報告をし合って終わったというところです。以上、報告を終わります。(拍手)

司会 大坪先生、どうもありがとうございました。以上で本日のスケジュールはすべて終了となりますが、終了に際しまして、閉会のご挨拶を熊谷頭明治大学教育会副会長から頂戴します。お願いします。

熊谷 颯 明治大学教育会副会長挨拶

熊谷 総会、高野先生のご講演、分科会と2時から長時間になりまして、先生方、参加者の皆さま方には大変お疲れかと思えます。長時間ありがとうございました。教育会の支部も4支部ということで倍増しました。分科会もいまの報告にありましたように大変充実してまいりました。新しい役員も決まりました。事務局の先生方も決まりました。また教育会はさらに発展していくものと思っています。

最後に本日までご出席、ご参加いただきました方々に明治大学教育会がますます発展するようにご理解、ご支援を賜りたいと思います。それではこれもちまして第3回総会・研究大会を閉じたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)